

自由学園南遺跡第 88 号住居跡発掘調査報告

奈良忠寿、2012 年度最高学部考古学グループ
(小沢 悠、櫻田裕貴、鈴木 仰、武田恵暉、早川真里)

自由学園校内に存在する、縄文時代遺跡の発掘報告である。2011 年の雨水排水工事に伴い、最高学部の考古学グループが発掘調査を行った。限られた範囲の発掘調査だったが、今から約 4800 年前(縄文時代中期・勝坂 3 式期)の竪穴住居跡が見つかり、住居の中には埋設土器という乳児を埋葬した施設が存在した。勝坂式土器が使われていた時期の埋設土器は学園内で初めての発見であり、貴重な資料となった。

1. 発掘の経緯と経過

2007 年度から、学園内で雨水対策として園路のインターロッキング舗装や雨水排水管の整備が行われた。学園内には遺跡が埋もれているため、工事の時には対応が必要になる。今回も、市教育委員会による試掘調査を行い、工事の深さを遺跡へ影響のない深さまでにとどめていただいたり、新たに掘削し管を埋設する部分は遺跡に注意して工事を行うなどをしていただいた。

今回報告する第 88 号住居跡は、2011 年 6 月末に新たに掘削し排水管を埋設する部分(図 1 の③の地点)で、工事中に発見された住居跡である。

この部分は、竪穴住居跡が密集すると考えられる範囲の北端付近にあたるため、工事開始前に、学内の工事担当者の宮井氏と相談し、念のため表土を剥がした段階で土の状況と遺物・遺構の有無を確認させていただきたいということをお願いした。奈良が観察した結果、竪穴住居跡らしい落ち込みを発見したので、その部分の工事を一時中断していただき、東久留米市教育委員会の井口直司氏と対応について相談を行った。その結果、工事が着工していて緊急性があること、工事による破壊範囲が限定的なことと、専門家である奈良が教育の一環として学生を指導して調査する体制がとれることであり、2011 年 3 月に市教育委員会が行った試掘調査の延長として、奈良が学部生と共に調査・対応することになった。

宮井氏を通して工事予定の調整をお願いし、2011 年 6 月 29 日から 7 月 2 日の間、考古学グループ学部 1 年生 5 人と調査を行った。

調査部分は、砂利敷きの園路(道路)となつて

おり、車の通行を止めることができず、半分ずつ調査を行った。東半分で見えられた竪穴住居跡を調査した後、西半分の調査も行ったが、そこらは包含層のみで遺構は検出されなかった。また、遺物も少なかった。

2. 調査地点と発掘された遺構

調査した範囲は、幅約 0.6m、長さ約 15m の範囲である。このうち、竪穴住居跡が見つかった 5 m ほどの部分を重点的に調査した。

地形的には、崖線から 100m ほど台地の内部に入り込んでおり、遺跡の南端域と思われる。園路として整地されているが、本来は東西にゆるく傾斜するがほぼ平坦な地形だったと考えられる。

今回調査した園路上には、雨水排水工事に伴って試掘調査や緊急対応の発掘調査が行われている。2008 年 3 月には、横断側溝の工事中に竪穴住居跡が発見され(図 1 の①の地点)、2011 年 3 月には東久留米市教育委員会による試掘調査として幅 1 m ほどのトレンチ調査が行われ(図 1 の②の地点)、竪穴住居跡が 5 軒見つかった(いずれも整理中)。その地点から、南東に 30m ほどの地点が、今回報告する調査地点である。

調査した竪穴住居跡は、ちょうど、住居跡の中央付近の短軸方向にトレンチを入れた状態だとみられる。調査範囲外の部分も含めると、長軸 3.0 m 短軸 2.6m の小判形の住居跡であると考えられ、調査した範囲で柱穴が 3 本、埋設土器が 1 基確認された。柱穴のうち、P3 は深さが浅いことと、その位置関係から埋設土器と対になるビットであり、上屋構造とは関わらないと思われる。

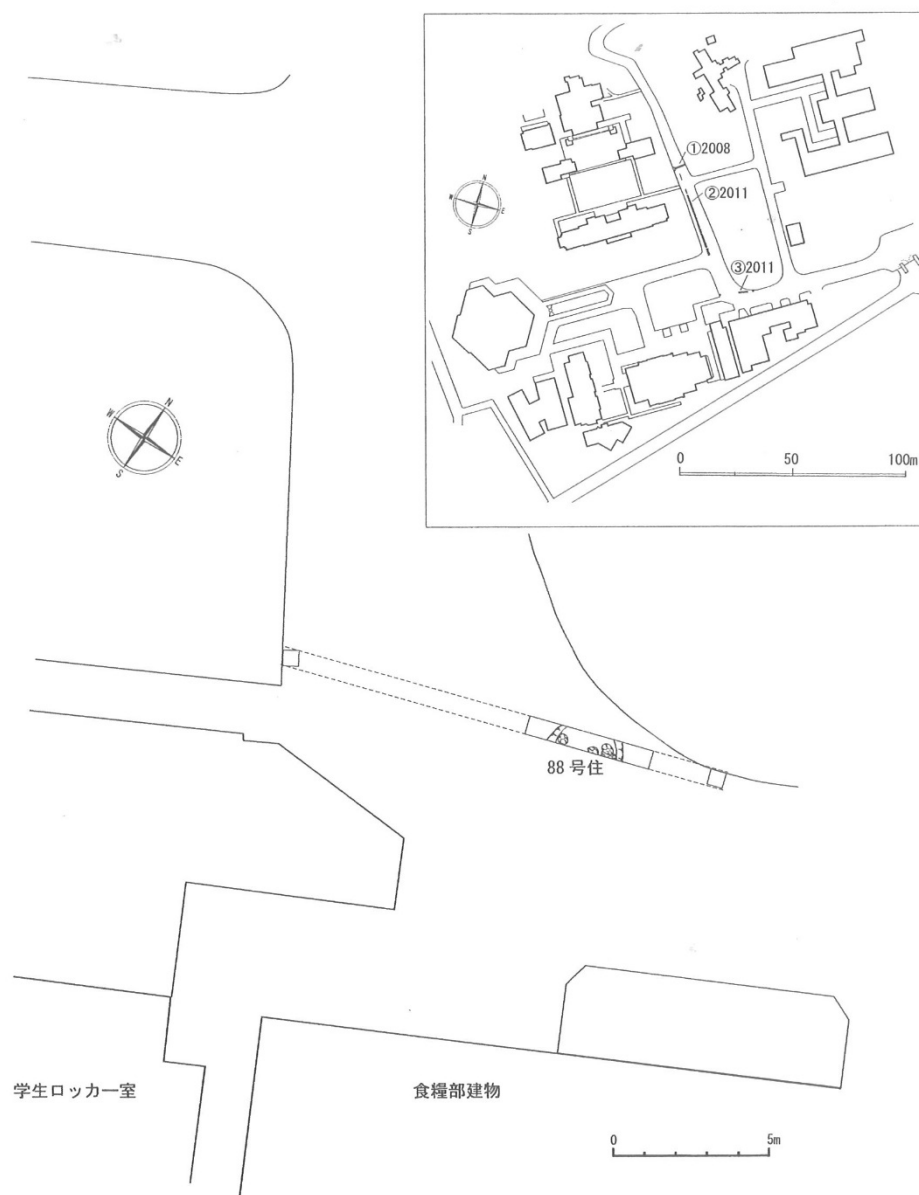
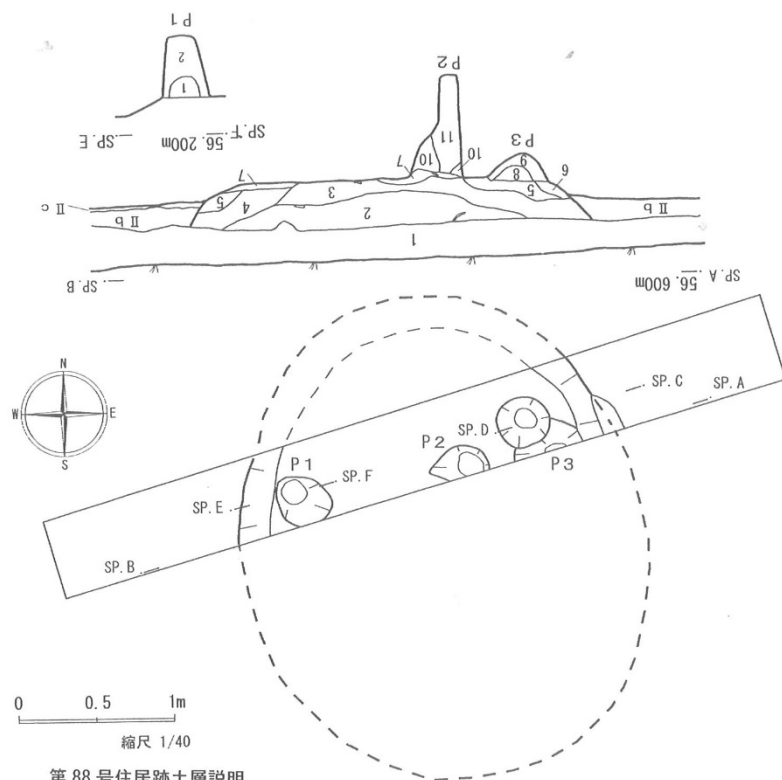


図 1 発掘地点



第88号住居跡土層説明

- 1層：旧表土ならびに填圧砂利層。
- 2層：黒褐色土層。ローム粒子を含み、赤色粒子・炭化物粒子少量。遺物が多い。
- 3層：暗褐色土層。2層よりもやや明るい。ローム粒子の量は1層と似るが、大粒化。
赤色粒子・炭化物粒子は1層よりも少量。
- 4層：暗褐色土層。3層と色調同じ。ローム粒子が少ないため分層。
- 5層：暗褐色土層。3層・4層よりも明るい。ローム粒子を少量含むほか、粒子はほとんどない。
- 6層：褐色土層。5層よりも明るい。大粒のロームブロックが含まれる。
- 7層：褐色土層。まだらに、ローム質の土を含む。6層よりもローム質土が多い。
- 8層：暗褐色土層。5層よりも明るい。ローム質土が斑状に入る。
- 9層：暗褐色土層。ローム質土に暗褐色土が混ざった土層。下部にはハードロームブロックも混ざる。
- 10層：暗黄褐色土層。11層よりも明るく、しまりあり。ソフトローム層が汚れた感じ。
- 11層：暗黄褐色土層。ボロボロしたローム質土。しまりは弱い。
ハードローム粒子・ソフトローム粒子、褐色土がまだらに入る。

P1土層説明

- 1層：褐色土層 褐色土に黒褐色土がブロック状に混ざる。ロームブロックを含む。
- 2層：暗黄褐色土層 しまりの弱いローム質の土。ロームブロックを含み、褐色土もブロック状に入る。

図2 第88号住居跡 全体図

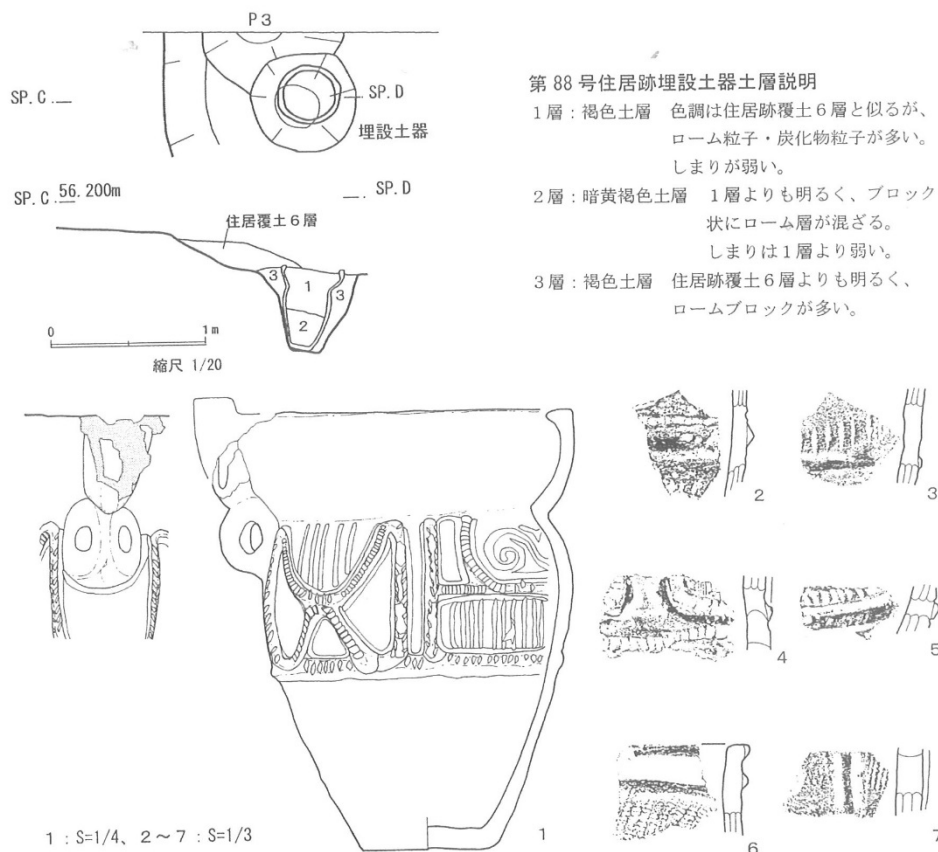


図 3 第 88 号住居跡埋設土器の出土状況と住居跡出土遺物

3. 出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器片約 50 点、礫約 10 点である。このうち、住居覆土内の遺物がほとんどであり、石器は出土していない。なお、今回は調査期間との兼ね合いで遺物は、遺構一括・土層一括で取り上げている。出土遺物が限られているため、住居の時期を考える上で、最大の手がかりは埋設されていた土器である。

図 3・1 は、把手が欠けているもののほぼ完全な形で埋設されていた。ただ、砂利道の填圧によって土器が脆くなっており、取り上げの段階で崩れ、復元ができなかった部分もある。復元にあた

っては、土器を補強するためにバインダーを浸透させた。

胴部にある文様帯は、双環状突起を中心に大きく 2 つの区画で構成され、一つは S 字を中心にした区画、もう一つは X 字を中心にした区画となっている。区画を構成する隆帯には、矢羽根状の刻みと連続押圧文の刻み、爪形の刻みが使われ、パラエティーに富んでいる。区画内には沈線と三叉文が充填されている。施文順序は、始めに粘土紐を貼り付け、その後粘土紐に沿って沈線を引き、区画の中に文様を書いている。

胎土には、砂が多く含まれる。直径 1mm 未満の

丸く小粒の砂岩が多いが、所々に1mm～3mm程の大粒のチャートが見られる。中には3mm以上の大きなものもあり、最大で幅5mm長さ15mmのものがあつた。

土器の時期は、文様から勝坂3 a 式と判断される。

住居覆土中の土器片は填圧されていてもらつたが、いくつかを図示した。

図3・2は隆帯に沿って一列の押引文が施文され、その下部には爪形文が施文されている。阿玉台I b 式。3は爪形文が施文されている。2と同時期の阿玉台式。4は刻みをもつ隆帯に沿って連続刺突文が施文される。勝坂2式。5は隆帯にそつて竹管の内側を利用したカマボコ状の半隆帯が施文され、その内部に連続刺突文が充填されている。勝坂2 b 式。6は加曽利E1式。地文の縄文は隆帯を貼り付けた後に施文されている。7の地文は撚糸文。曾利I 式ないしは加曽利E1式土器。

4. 考察

(1) 竪穴住居跡の時期と集落内での位置づけについて

88号住居跡は、住居内埋設土器が見つかったが、竪穴住居跡の所属時期を考える上では、住居内からほかの遺物や、竪穴住居の形状などを総合的に考える必要がある。

住居内から出土した遺物は少ないが、遺構確認面では、勝坂2式土器と加曽利E1式土器、覆土中からは勝坂2式土器や阿玉台I b 式やII式土器が出土している。いずれも小片であり、覆土形成過程で一括廃棄された状況ではなく、埋没過程での流れ込みと思われる。

竪穴住居の形状の点では、自由学園南遺跡ですでに発掘されている勝坂3式期の住居跡と比較を行った。類似点は、小判形という住居の外郭線が似ており周溝がないこと、柱穴が壁から離れた所に存在し、住居の中心付近にもあることである。覆土中に一括廃棄された土器が見つかっていないため、埋没時期の判断も難しいが、積極的に勝坂3式期以降の住居跡であるという判断材料もない。

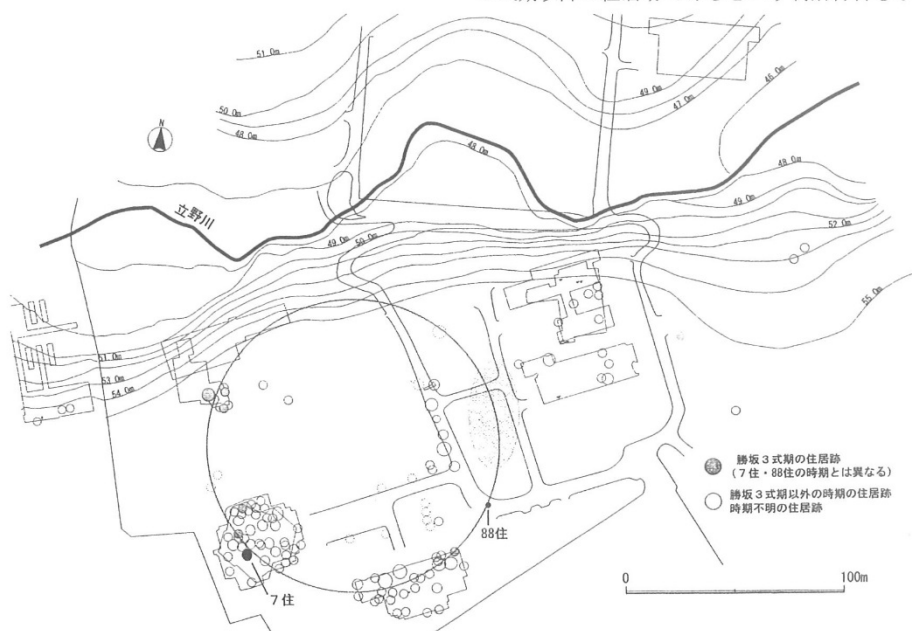


図4 勝坂3式期の竪穴住居跡の分布と居住域

このため、88号住居跡の埋設土器は、住居構築時とはほぼ同時期の土器を使用していると考えられ、88号住居跡は勝坂3式期の住居跡である可能性が高い。

次に、集落全体の形状や特徴を考えるため、自由学園から発掘された勝坂3式土器と88号住居跡の埋設土器とを比較する。

88号住居跡埋設土器と、形や施文がよく似ているものとして、自由学園南遺跡第7号住居跡で発掘された炉体土器(図4参考資料)がある。

両者は、口縁部が緩く内湾し、頸部でくびれ、胴が張る器形の形状が共通し、胴部に横帯する文様帯、隆帯による文様区画や区画内に沈線による充填文が存在する点も類似する。このため、时期的には同時期の土器と考えられる。

ほかに、勝坂3式期の住居跡が、その可能性が高い住居跡も含めてこれまで7軒見つかっている。それらの住居跡の位置から仮にドーナツ状に堅穴住居跡が存在する場合を想定してみた。地図上で黒の丸が第88号住居跡と第7号住居跡で、やや薄いトーンの丸が土器の比較から勝坂3式でも第88号住居跡とは時期が異なる住居跡、白抜きの丸は、勝坂3式以外の堅穴住居跡や時期がわからない堅穴住居跡が見つかっている場所を示している。

これまでわかっている住居跡の分布状況から、勝坂3式期の堅穴住居跡はおそらく大きな円に沿ってドーナツ状に存在する可能性が高く、なかでも第88号住居跡は、南東端付近にあたる可能性が高いと考えられる。また、網掛けした部分は、これまでに発掘調査が行われていない場所だが、南北を軸とする対称形の集落だった場合には、勝坂

3式期の住居跡が存在する可能性が特に高いと考えている。

(2) 住居内埋設土器について

第88号住居跡からは、住居内埋設土器が発見された。この住居跡からは炉跡が調査範囲内からは見つかっていないが、埋設土器の掘り方や内部からは焼土が観察されなかったこと、住居跡の壁に近い位置に存在することから、今回発見された施設は住居内埋設土器であると判断した。

これまで、自由学園南遺跡から見つかっている住居内埋設土器を住居の時期ごとに集計すると、加曽利E式期のみであり、加曽利E3式期が特に多い。また、屋外埋設土器を含めても加曽利E式のみである。

このため、今回の第88号住居跡は勝坂式期における住居内埋設土器の初めての例となった。

自由学園南遺跡が立地する黒目川流域のほかの遺跡でも、勝坂式期の住居内埋設土器は新座市池田遺跡4号住居跡(勝坂2b式期)で見つかっているのみで、住居内埋設土器は加曽利E式期の住居跡がほとんどである。住居内埋設土器は、土器の内部に死んだ乳児や胎盤を埋葬・埋納した施設だと考えられているが、第88号住居跡の事例は、住居内に土器を埋設するという風習がどのようにしてこの地域に受容されるようになったのかを考える上で、貴重な資料になる。

自由学園南遺跡住居内埋設土器時期別集計

		住居内埋設土器	屋外埋設土器
勝坂式期	1式期		
	2式期		
	3式期	88住	
加曽利E式期	E1式期		
	E2式期	13住、17住、38住、58住	
	E3式期	2住、18住、21住、44住 46住、53住、59住、67住 73住	2埋、9埋
	E4式期	45住	1埋、3埋、4埋、5埋 6埋、7埋、8埋、

参考文献

- 『池田遺跡発掘調査報告書』1976 新座市教育委員会
『自由学園南遺跡』1982 自由学園
『自由学園南遺跡Ⅳ・Ⅴ』2005 自由学園



図5 第7号住居跡炉体土器 (S=1/8)